

フレーベルの球体法則における父性と母性

群馬大学 豊泉清浩

はじめに

フレーベル（F. W. A. Fröbel, 1782-1852）の球体法則における父性と母性の対立と結合の関係を、ユング（C. G. Jung, 1875-1961）の分析心理学の観点から、グノーシス主義及び錬金術との関連において探るのが、本発表の目的である。球体法則と錬金術との関係については、すでに言及している¹⁾が、本発表では、ユングの研究に基づき、錬金術の源流をグノーシス主義に求め、グノーシス主義及び錬金術の思考形式が、球体法則に極めて近いことを明らかにする²⁾。

本発表では、まず球体法則の性格について見て、次にユングにおける錬金術研究と元型論について考察し、それから球体法則とグノーシス主義及び錬金術との関係を探る。最後に、球体法則における父性と母性の関係を、幼稚園構想との関連において考察する。また本発表では、球体法則との関連において、幼稚園運動における女性の地位向上や母性の保護の意味を捉える。つまり、球体法則は、男性性と女性性、父性と母性の調和を目指す思想であるとともに、男女同権という時代の流れを先取りする立場であったことを明らかにしていく。

1. 球体法則の性格

フレーベルの球体法則とはどのようなものか、その輪郭は、主に次の三つの資料によって明らかになる。

(1) リンケによるフレーベルの「日記帳からの抜粋」（1935年）である。その中でも特に、1811年8月2日に、フレーベルは、「日記帳」に、「球体的な法則、科学、哲学に関する諸命題」と題して27箇条に及ぶ命題を書き残している³⁾。

(2) ボーデが、1811年の「日記帳」に散在する草稿を整理・編集した「1811年の定式化に従った球体法則の表現」（1925年）がある⁴⁾。

(3) カイルハウの一般ドイツ学園の『学校案内』第2号に掲載された「徹底した教育、つまりドイツ人を十分に満足させる教育は、ドイツ民族の根本的かつ源泉的要求である」という論文（1821年公刊）から、W. ランゲが抜粋し、『フレーベル教育学全集』の「箴言」（1821年）の「編集者の前書き」の中に採録したものが⁵⁾。

まず、リンケによる「日記帳からの抜粋」の内、1811年8月2日に「球体的な法則、科学、哲学に関する諸命題」として書き残した27箇条の中から、球体の意味を探るのに重要と考えられるものを記してみる。

- (1) 全宇宙を通じて、ただ一つの原理のみが支配している。
- (2) この法則は、プラス（+）とマイナス（-）の法則、あるいは対立の法則である。
- (3) この法則は、中心からあらゆる方向へと同時に現出し、あるいは、球体的に現出する。
- (4) 存在する万物は、この球体的法則の支配下にある。
- (5) 全宇宙は、球体的である。

- (6) 永遠の創造者の座は、……その中心に (ある)。
- (18) 婚姻の中でのみ、完全な学問は存在する。
- (19) そして、学問は、婚姻が純粹で、完全で、幸福なものであればそれだけ完全なのである。
- (20) 婚姻は、同分母 [n] の結合である。—?—対立物。
- (21) 女性は、男性と同様に、学問および洞察へと向かうべく規定されている。

これらの命題によると、球体法則は、対立の法則であり、学問を貫き、完全な学問は婚姻の中でのみ存在する。つまり、球体法則は、学問が婚姻と深くかかわることを前提としつつ、男性と女性の両極的対立とともに、婚姻によるその結合を表わしているのである。

ボーデは、1811年の「日記帳」に断片的に書かれたものを、整理・再構成して球体法則の展開を跡づけている。ボーデは、幾何学的な図を示しながら、円形ができ、完全な球が出現する過程を、克明に描き出している。

ボーデの論述は、数学的形式によって、万物の根源である永遠なるもの、すなわち神からすべてのものが流出し、両極的対立を再統一し、包含するものとして球体が現出することを描き出している。特に興味深い点は、球体は対立を再統一する展開によって生じることであり、その両極的対立は、男女の性差による対立として示されていることである。ボーデの論究から見ると、リンケの日記の抜粋に見られる球体法則の命題と同様に、球体法則は、対立の法則であるとともに、その対立を結合する法則であり、とりわけ男女の性的対立を包含する要素を持っていることを示している。

フレーベルが1821年に書いた「箴言」のランゲによる「編集者の前書き」に、球体法則に関する記述がある。ランゲによれば、この小冊子には、フレーベルがゲッチンゲン大学の学生時代に書き下ろした球体の本性についての余韻が見出され、球の徹底的な考察から彼の内に生まれた考えが、1821年においてもいかに彼を支配していたかが次の箇所から明らかであると指摘している。その箇所の文章をいくつか記してみる。

「球的なものは、統一性における多様性の表現であり、多様性における統一性の表現である。」

「球的なものは、統一性から自己展開しつつ、統一性に安らっている多様性の表現であり、すべての多様性の統一性への再帰の表現である。」

「あらゆるものは、自らのうちで自らによって、自らの統一性、個別性、多様性において自分の本質を表現しようと努め、かつ実際に表現することによってのみ、完全に自分の球的な本性を展開する。」

「人間の使命は、もっぱらまず自分の球的本性を、次に球的存在一般の本性を展開し、形成し、表現することである。」

「ある存在の球的本性を展開するために意識的に働くことは、この存在を教育することである。」

「球体法則は、すべての、真に満足できる人間形成の原則である。」

「箴言」における球体法則についての言及は、リンケやボーデの論究に見られる球体法則観と、後の『人間の教育』の冒頭の文章に端的に表現された球体法則に基づく世界観との架橋になっているとともに、より『人間の教育』における世界観に近いものとなっている。

2. ユングにおける錬金術研究と元型論

フレーベルの球体法則の性格を見ていくと、そこには錬金術と同じ発想があるように思われる。ユングは、錬金術の研究を通して心理学的着想を得た。

一般に、錬金術というと、作業で目指す最終物質は金と思われがちであるが、元の言葉は、ドイツ

語で Alchemie と言い、卑俗な金属から貴い金属（宝石）を作るための「術」を意味している⁶⁾。だから、元の言葉の中には金という言葉は含まれていない。最終物質は金と呼ばれるよりも、「ラピス（Lapis）」という石を意味するラテン語で呼ばれることの方が多かった。このラピスは、「哲学者の石」、「哲学者の息子」、時には「永遠の水」などの名で呼ばれている。ユングは、作業の過程、すなわち作業の一つ一つの局面が、人間の心を映し出していることに気づいた。つまり、その作業の中に、われわれ人間の心を投影していたということである。ユングは、作業の過程や一つ一つの物質は、心の性質やその変化を表わすシンボルとなっていたのではないかと考えたのである。

さて、ユングは、人生後半に心の中の諸対立を統合する自己形成の動きを「個性化 (Individuation)」と名づけ、この「個性化過程」の到達点を「自己 (Selbst)」という言葉で表わす。錬金術で目指す最終物質、あるいは錬金術書に出てくる、蛇が自らの口で自らの尾をかんでいる円環、すなわちウロボロス、そして、球体や円のシンボルは、心の中の諸対立を統合した「自己」を表わしている。したがってユングは、錬金術の作業過程は、個性化過程と同様の意味を持っていると考えた。つまり錬金術師が作り出そうとしていた最終物質は、自己のシンボルであった。ユングは、「自己は、諸々の対立の結合である」⁷⁾と述べている。

ところで、ユングは、無意識の中には、個人的体験によって、個人的に獲得されたものではなく、遺伝によって存在する部分があることを発見し、それを「集合的無意識 (das kollektive Unbewußte)」と名づけた⁸⁾。個人的無意識から区別される集合的無意識は、心の中にいくつもの特定の形式を持っている。それらの形式は、いつの時代にもどこにでも広く見出され、神話学ではその形式を「モチーフ」と呼んでいる⁹⁾。この形式、つまり考え方や行動の特定の型を、ユングは「元型 (Archetypus)」と名づけた。「元型」とは、集合的無意識のパターンであり、「心の動き方のパターン」¹⁰⁾を意味している。

「元型」という言葉によってユングが考えていることは、神話、秘密の伝承、おとぎ話と関連づける場合には、きわめて明瞭に説明できるものである¹¹⁾。「元型」の数はいくらかでも存在しうるが、「元型」にはいくつかの典型的な類型がある。「母元型」、「母娘元型」、「童児元型」、「トリックスター元型」、「精神元型」等である。また、「アニマ」とは、男性にとって理想とする女性像であり、「アニムス」とは、女性にとって理想とする男性像である。

ユングによれば、「母元型の特性は『母性』である。」¹²⁾キリスト教で「母元型」に当たるものは、聖母マリアである。1950年に、カトリックにおいて「マリア被昇天」の教義が正式に宣布され、認められた。「マリア被昇天」とは、マリアが肉体のまま天に昇って、天の女王である花嫁として迎えられ、神と結婚するという、つまり神性を与えられたということの意味する。

3. 球体法則とグノーシス主義及び錬金術との関係

ユングの説によれば、錬金術の源流はグノーシス主義に求められる。しかし、グノーシス主義とは何かについては、簡単に述べられない難しい問題である。

グノーシス主義は、かつて2世紀を中心に、1世紀から3世紀にかけて、キリスト教の内部における最大の異端の立場であると見られていた。それは、キリスト教の教父によるグノーシス主義に対する反駁文の資料を根拠とする研究に基づいていた。しかし、1945年以後、エジプトのナグ・ハマディにおいて、コプト語によるグノーシス文書が大量に発見され、その後出版されたことにより、研究が急速に進展した。それにより、グノーシス主義は、原始キリスト教と相互に影響し合っていた別の宗

教であることがわかってきている¹³⁾。ここでいう原始キリスト教とは、正統な教義が成立する以前のキリスト教を指す。グノーシス主義は、4世紀頃キリスト教の正統な教義が成立した後、キリスト教から激しく論駁され、急速に衰退していった。ユングは、西洋精神史において、表面流にあったキリスト教に対して、グノーシス主義は、底層流に潜み、やがて錬金術に流れこんだと指摘している¹⁴⁾。

次に、ユングによるグノーシス主義及び錬金術についての理解の仕方を手がかりとして、グノーシス主義及び錬金術と球体法則との関連について探っていく。その際、原始キリスト教における「善の欠如」の教義、三位一体論、球というシンボルの三点について考察する。

ユングは、原始キリスト教における「悪とは善の欠如である」という教義に対して疑問を抱いている。彼は、「悪」がないのに「善」を語れようかという立場にある¹⁵⁾。この「善の欠如」という教義に対して、グノーシス主義は悪を認める立場であった。実際に、グノーシス主義の神話では、悪神であるデミウルゴスが、世界や人間を創造したことになっている。ユングは、「グノーシス派の人々が、悪の問題を徹底的に扱っていたことは、教父たちによる悪の断固とした絶滅とは最も目立った仕方において著しい対照をなしており、この問題がおそらくすでに3世紀の初めに注目を集めていたことを示している」¹⁶⁾と述べている。悪を否定しなかったグノーシス主義の立場に、ユングは注目している。

球体法則は、対立の法則であるから、「悪とは善の欠如である」という考え方を取らない。つまり善と悪の対立がある。フレーベルは、「人間の本性は、それ自体において善であり、人間のなかには、なるほどそれ自身において善い性質や傾向が存在する」¹⁷⁾と考えている。つまり人間は神に創造されたものであるから、決して悪いものではないと確信している。しかしフレーベルは、人間が神によって創造されたことを否定し、神に背く場合、あらゆる悪の唯一の源泉である虚偽を生み出すと指摘する¹⁸⁾。彼は、人間には下劣さや邪悪さもあるが、神によって真理のために創造されたことを自覚することによって、あらゆる悪を破壊し、善を育み、正しく導く努力が大切であると考えている。つまりフレーベルは悪を否定しないが、人間の本性は善であると捉えるのである。

またユングは、キリスト教の三位一体論には偏りがあり、グノーシス主義には、この三位一体論を補う要素があると考えた。キリスト教では、325年のニケーア公会議において、三位一体論を正式な教義として決定した¹⁹⁾。三位一体とは、神（父）、イエス（子）、聖霊を一体の神であると規定する教義である。この三位一体論は、男性性・父性に偏っているため、女性性・母性が排除されている。ユングは、この三位一体に、母元型の典型であるマリアを入れることによって、四要素一組の構造となり、この図式が安定すると考えた²⁰⁾。グノーシス主義における女神であるソフィアが、キリスト教において神性を与えられたマリアに対応すると見られている。

ユングは、男性性・父性に偏っているキリスト教に対して、グノーシス主義から錬金術へと流れ込んだ底層流は、女性性・母性をも包含する対立物の結合の思想であると考えている。その際、対立の究極的なものは、常に男性と女性の対立である。ユングは、「その対立は、両性の対立である。したがってアニムスとアニマは究極の対立の対を表現している。この対は、望みを失い論理的矛盾によって分離しているのではなく、この対立に特有な相互の引きつけ合いによって、結合を約束するだけでなく、可能にもしている」²¹⁾と述べている。前述したように、このような対立物の結合は、錬金術では「賢者の石」などと呼ばれ、個性化過程で実現を目指す自己を意味する。ユングは、「心理学的には、究極的なものは、意識（男性性）と無意識（女性性）の統合である。それは、心的全体性を表わす」²²⁾と述べている。

球体法則は、神、イエス、聖霊の三位一体に対して、家族関係に基づき、父、母、子の三位一体を

宗教的關係として示唆する立場を取っている²³⁾。フレーベルは、ユングのように四要素一組については明確に言及していないが、球体法則は、母すなわちマリアを入れた三位一体を主張していると見ることが出来る。この点においても、球体法則は、グノーシス主義及び錬金術の流れに近い発想を持っている。

さて、球というシンボルは、ユングの分析心理学の観点から見ると、ウロボロスを表現し、自己を意味する。ユングは、錬金術における石（ラピス）とグノーシス主義における原人間との関連について次のように述べている。「錬金術における賢者たちの石の『千の名前 mille nomina』は、グノーシス主義が人間（Anthropos 原人間）に対して与えたさまざまな名称に照応する。このことから、原人間とはどんな意味なのか、難なく明らかとなる。つまりそれは、より大きな、より広範囲な人間のことである。意識領域の心の営みと無意識界の心の営みとの総和から成り立つところの、なかなか簡単には言い表わしがたい全体性のことである。主観的な自我とは逆の客観的なこの全体性のことを私は自己と名づけたわけで、つまりこれは原人間という観念にまさにぴたりと照応する」²⁴⁾と。自己は、無意識が生み出すものの中に先験的に姿を現わすが、自己の全体性を表現するために、円のシンボルや四者構成のシンボルが使われる。ユングは、「原人間は、決まって両性具有である」²⁵⁾と述べている。錬金術の最終物質である石は、グノーシス主義の原人間と同じく、対立物の結合を表現しているということである。

このようにユングの解釈によれば、グノーシス主義における原人間、錬金術の最終物質である石は、自己を意味し、その自己の全体性を表現するシンボルが球である。したがって球体法則は、個性化過程を示唆し、球体は、自己を表現していると見ることが出来る。

4. 球体法則における父性と母性

球体法則は、幼稚園構想にも貫かれている。フレーベルにおける幼稚園の構想は、主に次の三つの目的があると考えられる。

第一に、幼稚園は、幼児教育の指導者、保育者を養成する意図を持つ施設であり、第二に、幼稚園は、子どもが自由な自己活動を通して創造的な活動衝動を育む場であり、第三に、幼稚園は、充実した家庭生活が営めるように世のあらゆる両親と子どもを援助する施設である。さらにもう一つ挙げるとすれば、女性の地位を向上させる施設という側面があったのではないかと考えられる。これらの構想も、球体法則との関連がある。

フレーベルは、保育者、幼児教育の指導者は、まず女性の仕事であると考え、次のように述べている。「女性の外的な職業上の仕事、市民的・社会的義務と子どもの本質の諸要求との間の媒介の実現を通じてのみ、女性の生活、すなわち婦人および母親の生活と幼児との根源的な合一が再び獲得され得る。すなわち、すべての階級のために、またすべての境遇の諸要求にしたがって、幼児期の女性保育者（Kindheitpflegerinnen）、すなわち保母（Kinderwärterinnen）、子守り（Kindermädchen）、女性の児童指導者（Kinderführerinnen）および教育者（Erzieherinnen）が養成され、また若干年齢の進んだ子どもたちのためには、男性の保育者、児童指導者および教育者が養成されることによってのみ、この根源的な合一が再び獲得され得るのである」²⁶⁾と。

フレーベルは、女性と子ども、母親と幼児の間に、真の母性を育成することは、幼稚園の目的の一つであると指摘している。彼は、女性に本能的に備わっている母性的なものを、教育され、自覚された真の母性にまで高めなければならないと考えている²⁷⁾。なぜなら、女性に、そして母親に備わって

いる神的なものが、子どもとの相互作用を通して自覚的に母性として形成され、自己活動を通して母性として表現されるからである。

またフレーベルが、幼児期の初期は、女性の保育者による保護が必要であるが、幼児期でも年齢が高い幼児には、男性の保育者、教育者が必要であると指摘しているのは、彼の学校構想の段階に関連している。彼は、「母親の腕や膝→小児部屋→幼稚園→媒介学校（基礎学校）→教授と思考の学校→職業と生活の学校」²⁸⁾という段階を構想している。彼は、幼稚園までは主に母性による教育で、媒介学校以降は、教授と職業教育における父親の役割を根拠として主に父性による教育になると考えている。幼稚園において男性の保育者、教育者が必要であると考えるのは、それ以降の教育の準備期間として、父性の存在を尊重しているものと思われる。この点に関して、フレーベルは次のように述べている。

「より多くを（外から）教える男性は、前に述べた必然的な対立法則にしたがえば、（まさに未来の教師として、保護者として、形成者として、また家族・共同社会ならびに民族の未来の父として）人間教育において、より少なからざる役割を演ずるものである。そして教育への男性の協力は、単に少年期や青年期から始まるだけでなく、すでに幼児期から始めなければならない。」²⁹⁾と。フレーベルは、幼稚園における男性の保育者の役割と家庭における父親の役割を重視している。

フレーベルは、確かに男性の保育者の重要性も主張しているが、保育の仕事は、まず女性の仕事であるとして、女性、母親に自覚を促すことを考えていた。したがって幼稚園には、女性の保育者、幼児教育の指導者を、職業的に確立し、女性の地位を向上させるねらいがあったと考えられる。フレーベルは、「全女性が、自己の使命と品位を認識し、この使命と品位との要求に応じて生活するように高める努力」³⁰⁾が重要であることを主張している。彼には、女性の地位向上と男女同権の思想があったと見ることができる。このようにフレーベルには、民主主義思想や人権思想と見ることができる側面があるが、それが常に球体法則が具体的に展開されたものである点に独自性を有しているといえよう。

球体法則における女性性と母性の尊重は、キリスト教の教義上の「マリア被昇天」と同じ方向性において捉えられるのではないかと考えられる。ユングはこの点に関連して次のように述べている。「法王の宣言の結果は重大きまわるものであつて、それはプロテスタントの立場を、女性を表わすものが天にいない単なる男性宗教ではないかという非難に曝すことになる。……プロテスタンティズムは明らかに、男女同権を示す時代の徴に十分に注意を払わなかった。すなわち男女同権は、『神的な』女性・キリストの花嫁・の形で、天上に根拠をもつことを要求しているのである。キリストの人格が組織によって代用できないように、花嫁も教会によって代用することはできない。女性的なものは男性的なものと同じように人格によって代表されることを要求するのである」³¹⁾と。ユングは、「マリア被昇天」の教義について、時代の趨勢である男女同権と合致するものと認識している。

ハイラント (H. Heiland, 1937-) は、カイルハウにおいてクリスマス祭がこの学園の大きな祝祭であった理由、またフレーベルが 1840 年代に教会の伝統と聖書的な言葉の上の信仰を拒否した「自由教団」の創始者ヴィスリセヌスと結びついた理由は、球体的に基礎づけられたキリスト教精神から理解される、と指摘する³²⁾。ここでいう球体的に基礎づけられたキリスト教精神とは、聖母マリアの存在を前提としたキリスト教解釈を意味すると考えられる。球体的キリスト教は、父と母と子の三位一体を示唆するということである。

むすび

フレーベルの球体法則は、対立の法則であるが、同時に対立物を結合する思想である。ユング心理

学の観点によると、球は、ウロボロス、すなわち心の中の諸対立を統合した「自己」を表わす。またフレーベルは、キリスト教の教義上の三位一体論に対して、父と母と子の三位一体を宗教的關係と捉える。三位一体に母が入る点に特徴があり、母は、母元型の典型であるマリアを示唆する。フレーベルは、「マリア被昇天」の教義が宣布される100年以上も前に、その教義に近い思想を持っていたのではないかと考えられる。この思想は、ユングも指摘するように、男女同権の思想に通じる。

球体法則は、キリスト教の教義と異なり、男性性と女性性、父性と母性の調和を志向する思想であり、ユングの解釈に従えば、キリスト教によって抑圧され、西洋精神史の底層流にあったグノーシス主義及び錬金術の思想に近い立場であると考えられる。この底層流にあったものを、フレーベルは、彼の直観により、球体法則として理論構成し、現実に存在しているキリスト教の教会の教義との葛藤通して、幼稚園の実践として結実させたと見ることができよう。

注

1) 豊泉清浩「フレーベルの球体法則における対立と結合——ユング心理学の観点から」、『人間教育の探究』第20号、日本ペスタロッチー・フレーベル学会、2008年、参照。

豊泉清浩「フレーベル教育学の研究方法としてのユング心理学について」、『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第58巻、2009年、参照。

2) ユングにおけるグノーシス主義及び錬金術の研究を基盤にした論考の代表的なものには、次のものがある。

湯浅泰雄「ユングとキリスト教」(1978)、『湯浅泰雄全集第三巻 西洋精神史 (I)』白亜書房、2002年。

湯浅泰雄「ユングとヨーロッパ精神」(1979)、『湯浅泰雄全集第四巻 西洋精神史 (II)』白亜書房、2003年。

一方、ロマン主義的な捉え方、すなわちユング的な視点からグノーシス主義を含むキリスト教史について論じた湯浅泰雄の研究や、さらにユングのグノーシス主義の研究そのものも否定的に捉える論考がある。(大田俊寛『グノーシス主義の思想——〈父〉というフィクション』春秋社、2009年、16-26頁、参照。)

3) A. Rinke, Friedrich Fröbels philosophische Entwicklung unter dem Einfluß der Romantik, Langensalza, Hermann Beyer & Söhne (Beyer & Mann), 1935, S. 117-118.

4) M. Bode, Friedrich Fröbels Erziehungsidee und ihre Grundlage, In: Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts 15 (1925), S. 118-184.

5) F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg. v. W. Lange, Abt. 1, Bd. 1, 1862, 1966, S. 263-264. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第一巻(教育の弁明) 玉川大学出版部、1977年、410-411頁。

6) 林道義『心の不思議を解き明かす——ユング心理学入門Ⅲ』PHP研究所、2001年、116-117頁。

7) C. G. Jung, Gesammelte Werke, 12. Bd., Psychologie und Alchemie, Hrsg. v. L. J.-Merker, E. Rüt, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S. 34. (C. G. ユング、池田紘一・鎌田道生訳『心理学と錬金術 I』人文書院、1976年、35頁。)

8) C. G. Jung, Gesammelte Werke, 9. Bd. 1, Die Archetypen und das kollektive Unbewußte, Hrsg. v. L. J.-Merker, E. Rüt, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S. 55. C. G. ユング、林道義訳『元型論(増補改訂版)』紀伊國屋書店、1999年、12頁。

9) ibid., S. 55. 同上訳書、13頁。

10) 林道義『無意識への扉をひらく——ユング心理学入門 I』PHP研究所、2000年、155頁。

11) C. G. Jung, Gesammelte Werke, 9. Bd. 1, a. a. O., S. 15. 前掲訳書『元型論(増補改訂版)』、30頁。

- 12) *ibid.*, S. 97. 同上訳書、106-108 頁。
- 13) 前掲、湯浅泰雄「ユングとキリスト教」、233-290 頁、参照。
- 14) Vgl. C. G. Jung, *Gesammelte Werke*, 9. Bd. 2, *Aion. Beiträge zur Symbolik des Selbst*, Hrsg. v. L. J. -Merker, E. Rűf, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S. 186, S. 248. C. G. ユング/M - L. フォン・フランツ、野田倬訳『アイオーン』人文書院、1990 年、194 頁、260 頁、参照。
- 15) Vgl. *ibid.*, S. 71. 同上訳書、81 頁、参照。
- 16) *ibid.*, S. 118.
- 17) Vgl. F. Fröbel, *Ausgewählte Schriften*. Bd. 2. *Die Menschenerziehung*, Hrsg. v. E. Hoffmann. (Pädagogische Texte, Hrsg. v. W. Flitner), Stuttgart:Klett-Cotta, 4. Aufl. 1982, S. 72. フレーベル、荒井武訳『人間の教育 (上)』岩波書店、1964 年、157 頁、参照。
- 18) Vgl. *ibid.*, S. 72. 同上訳書、158-159 頁、参照。
- 19) 前掲、湯浅泰雄「ユングとキリスト教」、291-341 頁、参照。
- 20) Vgl. C. G. Jung, *Gesammelte Werke*, 14. Bd. 1, *Mysterium Coniunctionis*, Hrsg. v. L. J. -Merker, E. Rűf, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S. 216-217. C. G. ユング、池田紘一訳『結合の神秘 I』人文書院、1995 年、237 頁、参照。
- 21) C. G. Jung, *Gesammelte Werke*, 9. Bd. 2, a. a. O., S. 283.
- 22) *ibid.*, S. 283.
- 23) F. Fröbel's *gesammelte pädagogische Schriften*, Hrsg. v. W. Lange, Abt. 1, Bd. 2, 1863, 1966, S. 509. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第三卷 (教育論文集) 玉川大学出版部、1977 年、539 頁。
- 24) C. G. Jung, *Gesammelte Werke*, 9. Bd. 2, a. a. O., S. 203. 前掲訳書『アイオーン』、213 頁。
- 25) *ibid.*, S. 218.
- 26) F. Fröbel's *gesammelte pädagogische Schriften*, Hrsg. v. W. Lange, Abt. 2, 1862 u. 1874, 1966, S. 457-458. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第五卷 (「続幼稚園教育学」・「母の歌と愛撫の歌」) 玉川大学出版部、1981 年、「続幼稚園教育学」、101-102 頁。
- 27) Vgl. *ibid.*, S. 243. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第四卷 (幼稚園教育学) 玉川大学出版部、1981 年、497-498 頁、参照。
- 28) *ibid.*, S. S. 501-522. 前掲訳書『フレーベル全集』第五卷、「続幼稚園教育学」、169-203 頁、参照。
- 29) *ibid.*, S. 248. 前掲訳書『フレーベル全集』第四卷、505 頁。
- 30) Vgl. *ibid.*, S. 243. 同上訳書、498 頁、参照。
- 31) C. G. Jung, *Gesammelte Werke*, 11. Bd., *Zur Psychologie westlicher und östlicher Religion*, Hrsg. v. M. N. -Jung, L. H. -Eisner, F. Riklin, L. J. -Merker, E. Rűf, L. Zander, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S. 466. C. G. ユング、林道義訳『ヨブへの答え』みすず書房、1988 年、148-149 頁。
- 32) H. Heiland, *Friedrich Fröbel in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1982, S. 71-72. ハイラント、小笠原道雄・藤川信夫訳『フレーベル入門』玉川大学出版部、1991 年、119 頁。